

小林秀雄著『本居宣長』: 三十一章主題《見る・知る(事の世界) : 語る[言(こと)の世界]》一體觀と、光圀/滝泊『大日本史』・白石『古史通』等[事の世界]〔實(事實)に據つて事を記す〕偏重との懸隔: その「關係論」的纏め。

①『見る・知る(事の世界)』『語る(言(こと)の世界)』(物: 場 C') ②『朴陋(ぼくろう: 素朴でいやしい)の俗』(物: 場 C') ③古人(物: 場 C') ⇒ からの關係: ①といふ私達の働きは、特に意識して離さうとしない限り、一體をなしてゐる。このやうに考へる⑥と、②を批判し、「④: 觀察して③(實)を知らう(客觀・實證的)とした⑦とは、事ごとに話が食違ふ(D1の至小化)事になる」⇒ 「⑤: 歷史の形で書かれた神の物語」(④的對立概念F) ⇒ E: 特に兩者の場合、扱はれた古記が、⑤であつたが爲に、二人の歩いた道に、大變際立つた(Eの至小化)對照が現れるといふ事になつた」(白石: ⑤への距離不獲得: Eの至小化) ⇒ ⑥宣長: ⑦白石(△枠): ①への適應異常。

①神代(物: 場 C') ⇒ からの關係: ①の記載をそのまま「②: 受取つてはならぬといふのが④の考へである」(D1の至小化) ⇒ 「③『詞』」(②的概念F) ⇒ E: 宣長では、決して離れる事のなかつた③[言(こと)の世界]と『意』(事の世界)とが、離れる(Eの至小化)のである」(③への距離不獲得: Eの至小化) ⇒ ④白石(△枠): ①への適應異常。

①『大日本史』(物: 場 C') ②近世の史學(物: 場 C') ③研究方法(物: 場 C') ⇒ からの關係: ①は、②の上で、最大の努力(D1の至大化)が拂はれ、最高の成績(D1の至大化)があげられた仕事だが、「④: 編纂者、光圀以下の⑥の意識的な努力は、③の上で、出来るだけ客觀的、實證的にならうとしたところがあつた[『通鑑綱目』を典範とする朱子學史觀の強い影響下]」(D1の至大化) ⇒ 「⑤: 白石と滝泊(『大日本史』編纂者)」(④的概念F) ⇒ E: ⑤との場合にしてもその點(客觀的、實證的)を見損なつてはなるまい」(⑤への距離不獲得: Eの至小化) ⇒ ⑥史家達(△枠): ①への適應正常。

(物: 場 C') ...

①『見る・知る(事の世界)』『語る(言(こと)の世界)』(物: 場 C') ②『朴陋の俗』(物: 場 C') ③古人(物: 場 C')。

①神代(物: 場 C')。

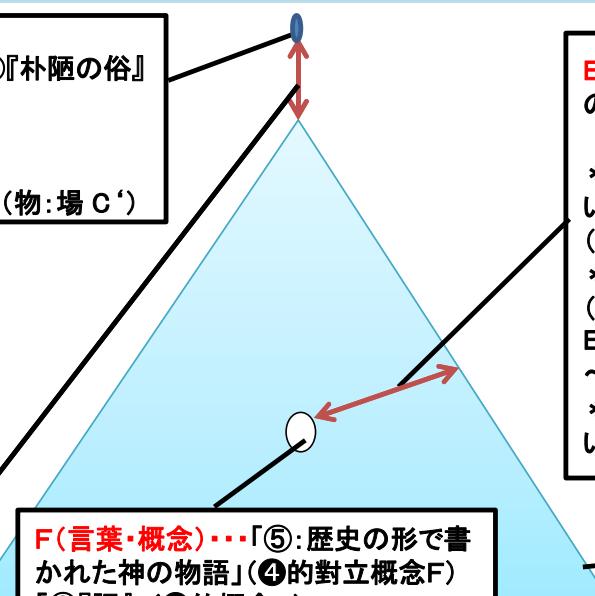
~~~~~

①『大日本史』(物: 場 C') ②近世の史學(物: 場 C') ③研究方法(物: 場 C')

からの關係(D1の至大化)

\* ①といふ私達の働きは、特に意識して離さうとしない限り、一體をなしてゐる。このやうに考へる⑥と、②を批判し、「④: 觀察して③(實)を知らう(客觀・實證的)とした⑦とは、事ごとに話が食違ふ(D1の至小化)事になる」。  
\* 「①の記載をそのまま「②: 受取つてはならぬといふのが④の考へである」(D1の至小化)」。

\* ①は、②の上で、最大の努力(D1の至大化)が拂はれ、最高の成績(D1の至大化)があげられた仕事だが、「④: 編纂者、光圀以下の⑥の意識的な努力は、③の上で、出来るだけ客觀的、實證的にならうとしたところがあつた[『通鑑綱目』を典範とする朱子學史觀の強い影響下]」(D1の至大化)。



F(言葉・概念) ... 「⑤: 歷史の形で書かれた神の物語」(④的對立概念F)  
「③『詞』」(②的概念F)  
~~~~~  
「⑤: 白石と滝泊(『大日本史』編纂者)」(④的概念F)

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法] ... 「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。

* 「特に兩者の場合、扱はれた古記が、⑤であつたが爲に、二人の歩いた道に、大變際立つた(Eの至小化)對照が現れるといふ事になつた」(白石: ⑤への距離不獲得: Eの至小化)。

* 「宣長では、決して離れる事のなかつた③[言(こと)の世界]と『意』(事の世界)とが、離れる(Eの至小化)のである」(③への距離不獲得: Eの至小化)。

* 「⑤との場合にしてもその點(客觀的、實證的)を見損なつてはなるまい」(⑤への距離不獲得: Eの至小化)。

(△枠) ⑥宣長: ⑦白石 / ④白石 / ⑥史家達